

インクル

第23号

財団法人 共用品推進機構

〒101-0064

東京都千代田区猿樂町
2-5-4 OGAビル 2階

"Incl." by The Kyoyo-Hin Foundation

共生社会の実現を願う妖精「インクル」。『包括的教育理念』を意味する英語「インクルージョン」から名付けました。



目次 / Contents

- 《ワイド特集》2003年春の新製品・新サービス 2
 大手も、中小・VBも、多彩な新機能を競う (高嶋健夫、橋本英和)
 (日本トイザらス、千趣会、サンエ芸、足の応援団、リーメント、カワグレ、立川アルミニウム工業、日本アルファ、大一興業、東洋繊維工業、大活字、旭電機化成、トヨタ自動車)
- 随想 私と共用品 第4回 7
 「共用品で日本再生」の夢 (佐藤俊夫)
- 『ようこそ共用品ワールドへ』 8
 子供たちにもわかるホームページ、4月から公開! (森川美和)
- 誌上再録・《共用品ビジネス実践講座》第4回・第5回 10
 「不便さ解消の創意工夫」が企業の発展を導く (高嶋健夫)
- キーワードで考える共用品講座 第22講 12
 「共用品の弾性値(その1:デフレータ)」(後藤芳一)
- 〈ニュース&トピックス〉
 「ISO/IECガイド71」、新委員会で人間工学的に詳細ガイド検討 (星川安之) 13
 『高齢者の余暇活動の実態とニーズ調査』報告書を刊行 (高嶋健夫)
 新しい交流の場「共用品サロン」がスタート (高嶋健夫) 14
- 共用品通信・情報アラカルト 15
- [事務局長だより] 16
 「手袋付き白杖」の温かさ、あるデザイン学生にもらった元気 (星川安之)
- 奥付

《ワイド特集》 2003年春の新製品・新サービス

大手も中小・VBも、多彩な新機能を競う 新たな販促キャンペーン、カタログ誌も登場

★……新しい共用品・共用サービスが続々と市場に登場している。高齢人口の増加によって巨大な高齢者マーケットがいよいよ本格的に立ち上がる一方、「ISO/IECガイド71」に代表される高齢者・障害者配慮の規格・指針の整備も国内外で急ピッチで進み中、大企業も、中小・ベンチャー企業も、共用品開発を加速させている。

★……社会的ニーズの増大という追い風を受けて、流通業界も新たな販促キャンペーンやマーチャンダイジング(MD)に取り組み始めた。そこで、本誌ならではのワイド特集を久々に組み、最新の新製品・新サービスをたっぷりとお届けしよう。
(高嶋 健夫、橋本 英和)

特報

日本トイザラス、全国135店舗で展開 「共遊玩具」の啓発キャンペーン

玩具流通大手の日本トイザラス(法人賛助会員)は3月25日から、目や耳に障害のある子供もいない子供も共に遊べる「共遊玩具」の普及啓発キャンペーンを、全国135の同社店舗で一斉に開始した。(社)日本玩具協会、(財)共用品推進機構の普及活動に協賛、より多くの消費者に共遊玩具をPRする狙い。従業員を対象にした研修を実施すると共に、店内に大判ポスターや「盲導犬マーク」と「うさぎマーク」のトーカーPOP掲示などを実施する。小売店店頭でのこうした共遊玩具の普及キャンペーンは今回の日本トイザラスの取り組みが初めてで、成果が期待される。

キャンペーンは「『共遊玩具』店頭啓発プログラム」と名付けて、同社が全国に展開する「トイザラス」134店、幼児向け玩具・用品専門店「ベビーザラス」1店の全店舗で実施する。対象商品は、日本玩具協会が認定した共遊玩具で、最大200アイテム程度になると想定している。店頭キャンペーンに先立って、従業員向けに共遊玩具の目的や商品要件などをまとめた説明資料やトレーニングビデオを作成、2月末から研修をスタートさせている。

3月25日から始まった店頭キャンペーンでは、ポスターやトーカーPOPの掲示と共に、店内放送での告知を継続的に行う。ポスター(=写真上)は

B2判・カラー印刷で、各店舗のインフォメーションボードなどに掲示する。図柄は、中央に盲導犬マークとうさぎマークを掲げ、その上に「知ってるかな?」と呼びかけるコピーを載せてい

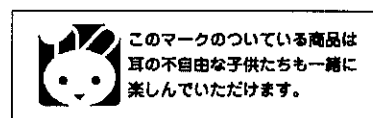
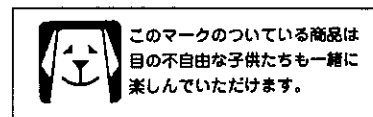
る。一方のトーカーPOP(=写真中、下)は9×3cmの大きさで、対象となる各商品ごとに掲示する。

キャンペーン期間は当面、大型連休が終了する5月5日までだが、同社ではその後もポスターやPOPの掲示は継続すると共に、新しい従業員向けの研修も実施していく考えだ。

■問い合わせ先:

日本トイザラス(株)セールスサポート課

TEL: 044-549-9011、FAX: 044-549-9034



千趣会、共用品カタログ誌を9月創刊

団塊世代が対象、掲載商品・サービスを募集

特報

通信販売大手の千趣会(法人賛助会員)は、共用品・ユニバーサルデザイン(UD)商品を集めた元気なシニア層向けの新しいカタログ誌『ベルメゾンカタログ 日々是吉日』(仮題)を今年9月に創刊する。高齢人口の増加をにらみ、元気な高齢者向けの商品・サービス販売の拡大を目指すもので、これまで30歳前後の若い女性層をターゲットにしていた同社では初の試みという。共用品・UD商品だけを集めたり、特集を組んだりした通販誌はこれまでもあるが、定期発行する専門誌は通販業界全体でもこれが初めてと見られる。

新しいカタログ誌は今年9月に創刊し、来以降は4月に春夏号、9月に秋冬号をそれぞれ発行していく。体裁はA4判、約100ページで、発行部数は20万部を予定している。

主な読者対象は55歳以上の団塊世代とし、「人

生の折り返しの時点で自己を見つめ、自分のゴールに向けてますます焦らず快適に生きようとする人たちへの商品提案・サポートサービス」をコンセプトに、掲載商品を選定する方針だ。具体的には、医療、服飾雑貨、インテリア、化粧品、食品、雑貨などの「元気に活動するための共用品」、旅行、リフォーム、保険など「元気に行動するためのサービス商品」を合わせて、当面は300アイテム程度の掲載を目指している。

千趣会では、共用品推進機構の法人賛助会員や個人賛助会員の所属企業に対して、同誌への掲載・販売商品・サービスを広く求めている。資料送付・商談・照会先は、下記のとおり。

■(株)千趣会シニア事業企画(担当者は加藤氏、山口氏)

〒141-0022 東京都品川区東五反田1-21-13

TEL: 03-5475-7528、FAX: 03-5475-7534

サンエ芸「手摺り用音声案内装置」 最大16秒間、音声でガイド

触地図メーカーのサンエ芸(本社京都府久世郡久御山町、法人賛助会員)は、手摺り用の点字案内板に音声機能を追加した新機種を開発し、販売を始めた。

構造はステンレス製の点字付き手摺りの中にスピーカー、音声を入れた半導体メモリー、電池を組み込んだもの。本体の音声ボタンを押すと最大で16秒間、音声ガイドが流れる。

電池は市販のアルカリ9V角電池を使用。例えば、「ここは福祉相談室です」といった3秒間の案内なら約1万回、「階段を上り、右1番線新横浜・東京方面乗り場、左2番線新大阪・岡山方面乗り場です」といった12秒間の案内なら約2000回使用できるという。電池の残量ライトも付いているので、残量確認も容易にできる。サイズは295×300×40mmで、音声装置本体の希望小売価格は9万8000円。

■問い合わせ先: (株)サンエ芸

TEL: 0774-23-1133、FAX: 0774-23-7788

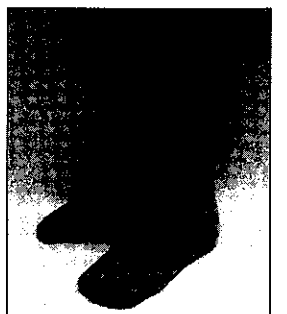
足の応援団「がんばれソックスくん」 前後左右、自由に履ける靴下

足の応援団(本社兵庫県掛川市)が製造販売する「がんばれソックスくん」=写真=はちょっと変わった靴下だ。かかと部分がない。つまり、かかと部分がどちらか気にすることなくどこからでも履けてしまう。「楽々フィットソックス」というネーミングのとおり、体が不自由な人、視覚障害の人はもちろん、健康な人にも楽に履けるように工夫されている。

指先・つま先のひっかかり防止にも工夫が施されているほか、ゴムによる締め付けも弱くなっているのか、かゆみを起こしにくく、足首などへの圧迫も小さい。指先もゆったりしているので、靴擦れの軽減にもつながるといえる。価格は780円。

■問い合わせ先: 足の応援団

TEL: 0794-32-7158、FAX: 0794-32-7158



**リーメント「電動空気入れPQ」
車いす用に最適、小型で持ち運びも楽**

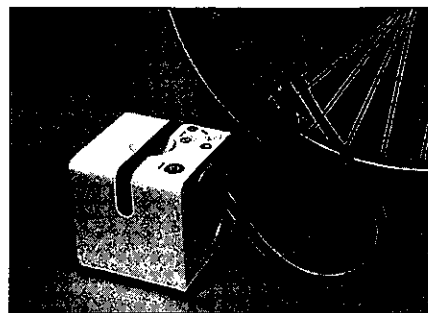
最近、車いすで外出する人たちをよく見かけるようになってきた。移動環境のバリアフリー化が進んできた成果ではあるが、その一方で、忘れてならないのが車いすのメンテナンスという問題だ。

車いすは車輪を使っているため、定期的にタイヤの空気を補充する必要がある。手の自由が利く人なら問題ないが、不自由な人にとっては、力のいる重労働である。そんな時に便利なのが、リーメント(本社東京・台東区)の「電動空気入れPQ」=写真=。チューブの先端部を、自転車や車いすなどのタイヤの空気挿入口にセットし、後は本体のスイッチをオ

ンにすれば、空気が自動的に送り込まれる。

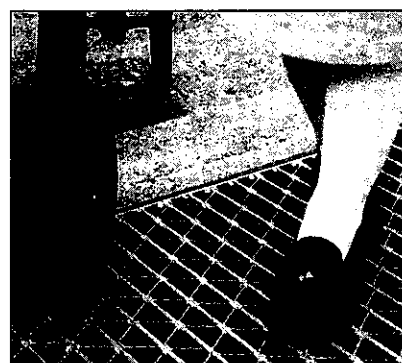
サイズは13.5cm四方の立方体で、重さは1kg。持ち運び用の取っ手も付いている。電池式なので使用場所を選ばない(単2乾電池8本で、約45分連続使用可能)。タイヤだけでなく、サッカーボールや浮き輪の空気入れとして、アウトドア用にももちろん利用できる。希望小売価格は3480円。

■問い合わせ先：(株)リーメント営業部
TEL：03-3533-7550、FAX：03-5833-7545



**カワグレ、UDグレーチング
車いす、ベビーカーもはまらない溝**

カワグレ(本社新潟県三条市)が開発した「ユニバーサルデザイングレーチング(UDG)」=写真=は、車いす、ベビー



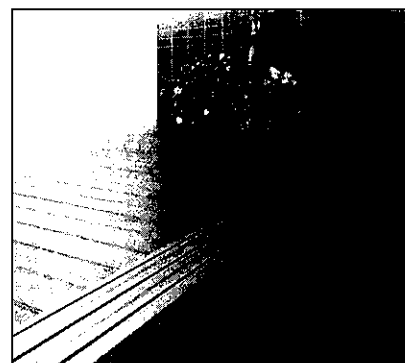
カー、シルバーカーなどが通っても車輪がはまる心配のない側溝のグレーチング(格子状の蓋)。バリアフリーのまちづくりを実現する土木資材として拡販を目指している。

UDGは溝の構造を従来の四角形からトライアングル(三角形)に改良したことで、従来品と変わらない排水性を確保しつつ、車輪や小さな子供の靴がはまりこむことを防ぐ新構造を実現した。さらに、表面に凹凸構造を採用して滑り止め効果を持たせている。形状・用途によって、「正方形ますぶた」「かさあげ式みぞぶた」「U字溝用みぞぶた」などさまざまなタイプを設定している。

■問い合わせ先：(株)カワグレ
TEL：0256-38-5011、FAX：0256-38-5013

**立川アルミ「ウォーキング」
ノンレール完全フラットサッシを拡充**

立川アルミニウム工業はノンレールサッシ「ウォーキング」シリーズに新たに「戸建て住宅用」=写真=を発売。さらに、



マンション・施設用シリーズに「網戸収納型」「ステンレス下枠仕様」「鉄骨納まり対応」の3タイプを追加発売した。

「ウォーキング」はサッシ独特の下枠構造をなくしてフラット化を実現する一方、同社が独自開発した等圧ウォーターバランス方式によって日本工業規格に準拠する高水密性を実現したのが売り物。マンション用は2001年夏に発売、今回の戸建て住宅用などの追加で一層の拡販を図る。戸建て用はホワイト、ブラック、ティージェーの3色を設定。木粉入り樹脂製ラティスなどの関連エクステリア商品も発売し、リビングとテラスの一体活用を提案する。

■問い合わせ先：立川アルミニウム工業(株)
住宅建材事業部業務部 TEL：0766-20-3559

**日本アルファ「アクアピタット」
浴槽の排水・止水を指1本で**

洗面台や浴槽の止栓の専門メーカーである日本アルファ(本社三重県三重郡朝日町)は、浴槽のゴム栓の代わりに取り付け、ボタン操作で簡単に栓を開け閉めできる付け替え用排水栓「アクアピタット」を発売した。同社はTOTO、INAXはじめ大手住宅設備メーカーの洗面台やユニットバス向けに止栓製品を供給しているが、新たな需要開拓を狙って一般市場向けの新製品を初めて開発した。

古いお湯を抜く際などに浴槽のゴム栓を外すのは意外と力が必要で、高齢者や車いすの人などには苦勞している人が多い。無理に引っ張って、鎖が途中

で切れてしまうこともある。「アクアピタット」は同社が持つ洗面台用の押しボタン式排水栓のノウハウを応用して開発した新タイプの栓で、押しボタンを指で押した力を先端の栓に伝えて栓を上下に開閉する仕組み。既存のゴム栓と鎖を取り外し、そこに取り付ける。

特に大がかりな工事は必要なく、誰にでも装着できる。ただ、浴槽の排水栓にはいろいろなタイプがあるが、適合するのは排水穴の口径43~54mm、深さ26mm以上のタイプ。同社では自宅の栓のサイズを確認するための紙製テスターを提供している。オープン価格。

■問い合わせ先：(株)日本アルファ
TEL：0593-77-2100、FAX：0593-77-4000

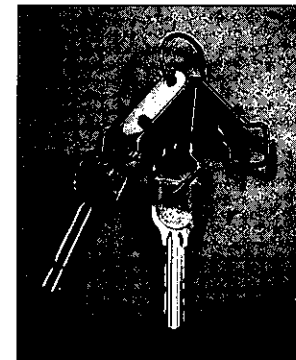
**大一鋼業「スライドマーキーミニ」
軽い力で鍵が付くキーホルダー**

キーホルダーで一番不便を感じるのは、鍵の取り付け。「鍵が外れにくいこと」が製品機能の最重要要件となるため、その分、「取り付けしやすさ」を犠牲にしていることが多い。そんな不便を改善したのが、大一鋼業(本社東大阪市)の「スライドマーキーミニ」=写真=である。鍵の取り付けはとても簡単。プレートの溝に鍵穴を合わせ、プレートを上下にスライドさせるだけで先端の輪の中に収まる仕組み。外す時も、同様の手順で簡単に外せる。

さらに、付けた鍵の識別にも一工夫されている。

似たような鍵を一目で区別するのは難しいが、「スライドマーキーミニ」では、3つあるホルダーがそれぞれホワイト、オレンジ、グレーに色分けされ、中央部には1~3個の凸点がそれぞれに付いているので、ぱっと見て判断したり、ポケットの中でごそごそと触って選び分けたりすることもできる。希望小売価格は500円。

■問い合わせ先：大一鋼業(株)
TEL：06-6723-0788、FAX：06-0723-5225



**東洋繊維興業「ミフラー」
片手で巻けるマフラー**

マフラーは、寒い季節に首もとを温めてくれる必需品。ぐるぐる巻くのは簡単だが、格好良く着こなそうと思うと、意外と時間がかかって大変だ。そんな時に便利なのが、東洋繊維興業(本社岡山県津山市)の「ミフラー」=写真=。片手でも装着できるマフラーで、手や腕が不自由な人にも便利そうだ。

装着方法は、まず普通のマフラーと同じく肩に掛ける。次に穴の開いた一端から手を差し込んで、も

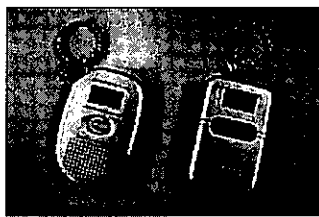
う一端をつかみ、穴から引っ張り出す。後は形を整えれば、装着完了となる。慣れればごく短時間で、しかも片手でも楽に巻くことができる。ずれ落ちにくく、軽量の素材でできているので、巻いたままでも動きやすい。価格は2900円。

■問い合わせ先：東洋繊維興業(株)ミフラー課
TEL：0868-22-9204、FAX：0868-31-3038



**大活字「キーホルダー型音声時計」
軽量・薄型で1個1000円**

視覚障害者向けの書籍出版、日用品販売の大活字（本社東京・千代田区）は、キーホルダー型音声時計を発売した。丸薄型=写真左=と角形=同右=の2タイプあり、価格は1000円（税込み）。



台湾メーカー製で、大活字と名古屋盲人情報文化センターとの共同仕入れによって仕入れ価格の低減を実現したという。本体中央に液晶で時刻を表示し、その下のボタンを押すと「ただいま〇時〇分をお知らせします」と女性の声で読み上げる。音質はきわめてクリアだが、音量調節機能はない。サイズは丸薄型が6.5×4.5cm、角型が6×4cm。ともに色はシルバー、ブラックの2色。ボタン電池使用。購入時に時刻などをセッティングしてから納品する。

■問い合わせ先：(株)大活字

TEL：03-5282-4361、FAX：03-5282-4362

**トヨタ自動車「ぴぴっとフォン」
機能を改良した2003年型モデル**

これまでうまく使いこなせなかった子供や高齢者向けに機能をできるだけ絞り、簡単な操作に配慮した「H」（エッジ）対応のPHS端末「ぴぴっとフォン」に、機能・カラーを一部リニューアルした2003年モデル=写真=が登場、3月から発売を始めた。110番、119番の呼びだし操作を簡素化したほか、ボディーカラーにブルー、ピンクを追加し全4色としたことなどが主な改良点。

「ぴぴっとフォン」はトヨタ自動車とDDIポケット、京セラが共同開発。通信相手先を登録した3件だけに限定したシンプル機能としたことで、操作が簡単になっただけでなく、迷わず、安心して利用することができるのが売り物。昨年11月には(株)テクノエイド協会の福祉用具登録され、高齢者・障害者施設などでの利用が増加しているという。

**旭電機化成「らくらくスイッチ」
既存のスイッチを大きなボタンに!**

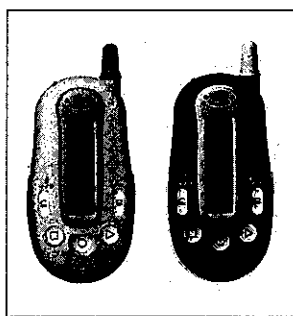
「スマイルキッズ」ブランドで電位関係を中心とする便利グッズを製造販売している旭電機化成（本社大阪市東成区）は、今あるスイッチの上に装着して軽い力で押せるようにする「らくらくスイッチ」を発売した。

高齢者、手や目が不自由な人の中には小さなスイッチの「入り切り操作」が辛い人も多い。最近のマンションではバリアフリー仕様の一環として、ワイドスイッチを採用するところが増えている。「らくらくスイッチ」は既存のスイッチの上に大きなボタンを貼り付けるもの。ボタンサイズは直径3?で、ON側には凸点が付いている。取り付け可能な埋め込みスイッチ盤はスイッチが1個か2個のもので、サイズは12×7cm。希望小売価格は800円。背の低い子供もスイッチを操作できるように、ボタンに紐を付けた姉妹品「こどもスイッチ」も同時発売。

■問い合わせ先：旭電機化成(株)

TEL：06-6976-1371、FAX：06-6976-8940

本体は小さな子供や握力の弱った高齢者にも持ちやすいように「手のひらサイズ」となっており、落としても安心なゴム製のトリムが本体をカバーしている。ボタンは全部



で5つ。そのうち3つのボタンは四角、三角、丸の記号で表記され、発信先3カ所の選択ボタンを兼ねている。画面は大きな文字で見やすく、機能説明などには、漢字にカタカナのルビがふられている。

また、「ここだよナビ」に登録すると、今いる位置を地図で親機（対応機種はauの携帯電話の「400」番台以降の機種）にお知らせすることができる。トヨタのケータイショップ「Pipit」のほか、全国のトヨタ販売店でも取り扱っている。オープン価格。

■問い合わせ先：トヨタ自動車(株)お客様相談センター

TEL：0070-800-778899

随想 「共用品で日本再生」の夢

私と共用品

佐藤 俊夫 (財)共用品推進機構企画委員、匠デザイン事務所代表

日本経済を建て直す処方箋が切実に求められ、行政や個人の多様な施策や提言が新聞を賑わせている。2000年からでも「経済戦略会議」や「産業競争力会議」、それを統合した「産業新生会議」などが発足し、時限立法の「産業再生法」や、「構造改革特区」、設立準備中の「雇用創出機構」などの施策が打ち出された。「やれることはなんでもやった」と言われているが、果たしてそうだろうか。

従来、資本主義経済の社会は、政治が民間に特定の事業を強制するのではなく、民間が経済活動や新事業開拓をしやすいように、金融、法制度などで側面から支援することだとされてきた。

そして、前記の諸施策はまさにそのルールに従って実施されてきたのだが、事態の改善にはまだ時間がかかるとされている。中小企業の倒産や失業率の増加などが待たなしで進行する中で、「なるようにしかならない」と諦めるには、まだやり残したことがあるのではないか。

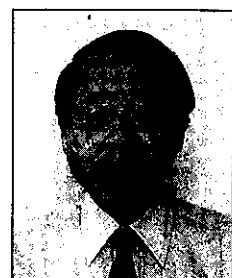
新たな「シーズタンク事業」の提案

ここはひとつ視点を変えて、産業活性化のパラダイムシフトを図ってはどうか。失業率を低下させるためには、雇用を創出する必要がある。雇用を創出するためには、新事業を開拓する必要がある。しかしながら、肝心のテーマがなかなか見いだせない。

そこで、新しい事業スキームを提案したい。そのような具体的な開拓テーマとその社会的価値、実現可能性などを公表して、企業の新事業開拓促進計画への参加意欲を刺激するような全く新しい枠組みである。今、これを仮に「シーズタンク事業」と名付けよう。具体化のためには、恒常的な活動組織の設立が急務だが、ベンチャー企業支援の金融業界のバックアップなども望まれる。

この「シーズタンク事業」を通じて、今の社会に何が求められているか、真に必要なものは何か、

そのニーズを見だし、現在および近未来の技術可能性のシーズとマッチングさせることで、社会が求める新たなハード・ソフトのテーマが抽出できる。



こうして公表されたテーマに取り組む企業に対しては、大企業や研究機関などが開発のための経済的、技術的、人的支援を行い、自治体が税制面の優遇措置をとることにより、開発のスピードが加速される。もちろん、テーマの設定、応募計画の評価などのハードルは高く、計画の社会的価値、発展の可能性、投資効率などの基準を満たすことが必要だ。

資源を集中し、まずは「成功例」づくり!

ここで大きな可能性を持っているのが「共用品・共用サービス」である。製品・サービスの共用性促進により、多様な人々が自立して社会活動に参加し、人生を楽しむことができるようになり、同時に需要の創造に大きな効果をもたらす。

具体的な開発テーマの例を挙げれば、高齢者も車いすの人も乗り降りしやすい「共用タクシー」、目の見えない人や高齢者が不自由なく街を歩ける「視覚情報提供システム」、耳の不自由な人が他人と自由に会話でき、背後から接近する警笛や呼びかけが聞こえる「音声情報提供システム」など、解決が求められる課題は多い。

近い将来、このような事業スキームが制度化されて、日本再生のターニングポイントとなることを期待したい。今、何よりも必要なことは、情報、技術、経済的支援の集中によって企業活動を活性化して、まずは成功例を示すことである。そのための効果的な仕組みを作ることが急務と考える。

(題字は中野奈津美・共用品推進機構運営委員)

『ようこそ共用品ワールドへ』

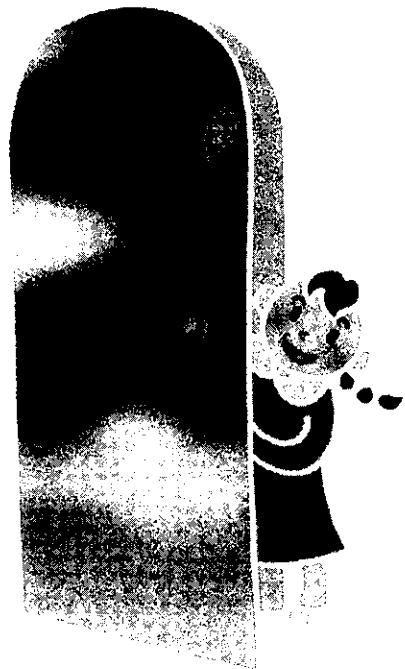
子供たちにもわかるホームページ、4月から公開!

「子供たちにもわかる共用品」シリーズの第2弾として、もっと楽しく共用品を知ることができるホームページ「ようこそ共用品ワールドへ」が完成、4月1日に財共用品推進機構のホームページ内に新たにアップロードされる。

機構では昨年度から、共用品を子供たちにもわかりやすく伝える活動を本格的に開始。第1弾となる小冊子『「共用品って何だろう?」「共用品って知ってる?』』を発行したが、それに続く試みとなる。パソコンを取り入れた小中学校の授業にも大いに役立つようにできている。

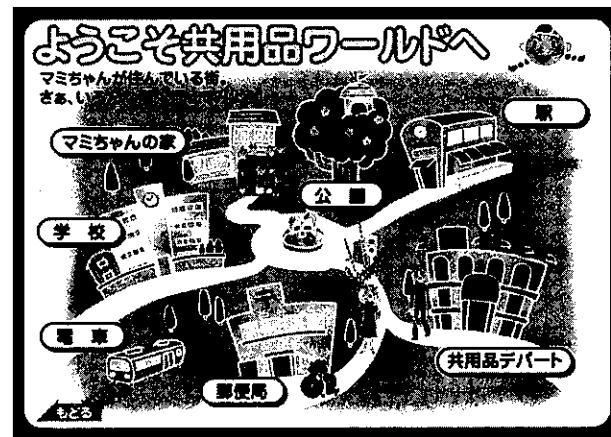
「共用品ワールド」への小さな扉

共用品推進機構のホームページ (<http://kyoyohin.org/>) にまずはアクセス。すると、トップページに向こう側に青い空が見える小さな扉が出てくる。「ようこそ小学生のみなさんへ」と書かれたここが「共用品ワールド」への入り口。主人公のマミちゃんが顔をのぞかせている扉をクリックして、いざ小さな冒険の旅に出発! (=イラスト1)



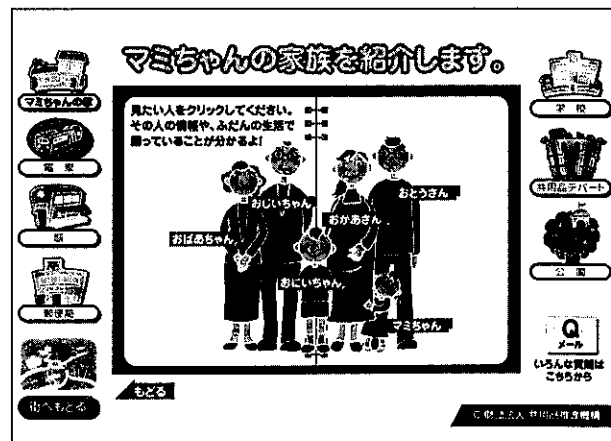
「ようこそ共用品ワールドへ」

扉を開けると、マミちゃんが住んでいる町の地図が出てくる。町は、「マミちゃんの家」「学校」「電車」「駅」「郵便局」「共用品デパート」「公園」から構成されている。まずは、マミちゃんの家をクリックしてみましょう (=イラスト2)。



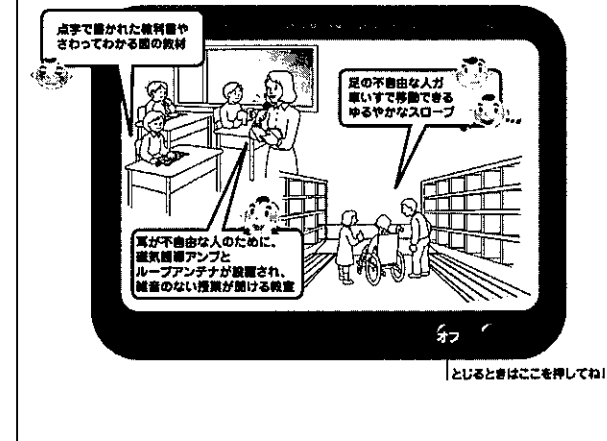
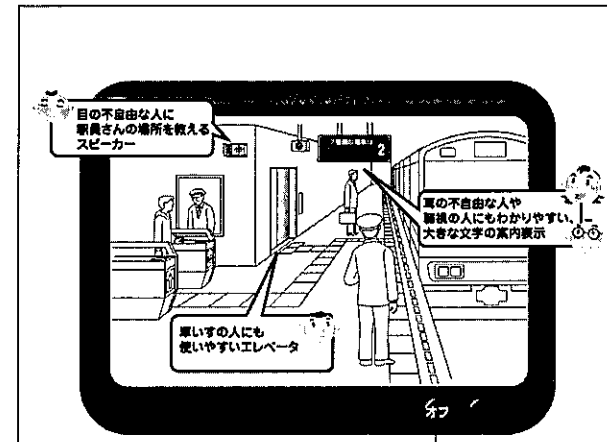
マミちゃんの家家族の困っていること

マミちゃんの家家族が出てくる (=イラスト3)。それぞれの人をクリックすると、その人の情報や普段の生活で困っていることがわかる。「カイケツ」ボタンをクリックすると、解決したところのイラストがでてくる。



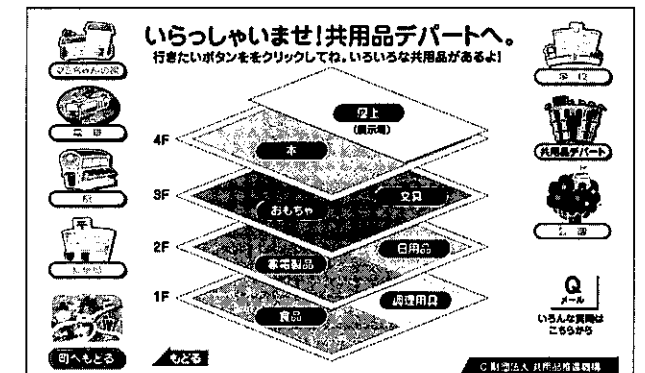
駅、郵便局、学校で配慮されていること

「電車」や「駅」「郵便局」「学校」などでは、それぞれの画面の右下にあるスイッチを押すと、スロープ、音声ガイドなどなど、それぞれの場所や建物ごとに配慮している事柄が現れる (=イラスト4、5、6)。



いらっしやいませ「共用品デパート」へ

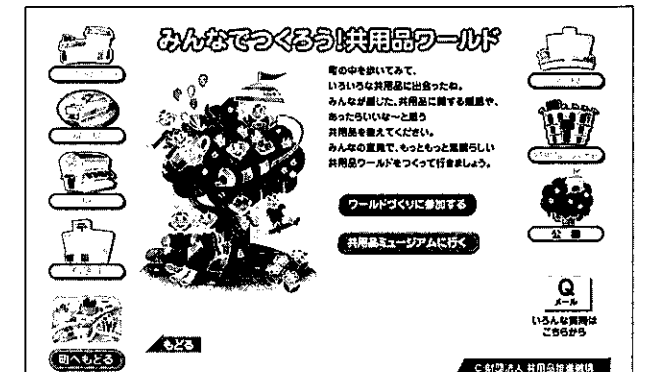
「共用品デパート」には1階から4階までの売り場と屋上の展示場があり、共用品が所せましと並べられている。それぞれの売り場をクリックしていくと、食品、家電製品など製品分野ごとにたくさんの共用品を丹念に見ることができる。小さな共用品の窓をクリックすると、1つひとつの製品の配慮点が出てくる (=イラスト7)。



みんなで作ろう! 共用品ワールド

今度は「公園」をクリック。すると、子供たちが考えた共用品や共用品ワールドが現れる。ここは、みんなで作っていく参加型のページ。アクセスした誰でも自由に「共用品ワールド」の市民になれる (=イラスト8)。

この新しいホームページは4月1日に正式オープンする。視覚障害の方たちにも対応できるように、テキスト版も用意している。今後は子供たちのアイデアも生かして、共用品・共用サービスの世界を広げていきたいと考えている。皆さんも是非立ち寄ってみてください! (森川 美和)



《共用品ビジネス実践講座》第4回・第5回

「不便さ解消の創意工夫」が企業の発展を導く

（財）共用品推進機構が主催する「共用品ビジネス実践講座」の第4回、第5回講座が1月8日、2月5日に東京・猿楽町の機構事務局会議室で開催された。第4回は矢野友三郎・経済産業省産業技術環境局標準課課長補佐、菊地眞・防衛医科大学校教授、第5回は三好泉・東京都立産業技術研究所製品技術部主任研究員、高嶋健夫・共用品推進機構『インクル』編集長、万代善久・共用品推進機構常務理事の各氏が登壇した。（高嶋 健夫）

第4回提言：矢野友三郎氏
「共用品の標準化政策」
“Think local, Act global”に向けて



■矢野友三郎さん

矢野氏は、日本工業規格（JIS）における「高齢者・障害者配慮設計指針」の整備など、標準化政策の流れと現状、今後の課題などについて概説した。

まず、高齢者配慮の5つの国連原則（自立、参加、介護、自己実現、尊厳）、障害者の機会均等化の22の基準原則（意識向上、医療、リハビリテーション、アクセシビリティなど）を踏まえて、わが国標準化政策の流れを解説。それによると、1998年に日本工業標準調査会（JISC）が高齢者・障害者に配慮した標準化を建議。2001年8月にJISC消費者政策特別委員会が発表した8つの重点分野の最上位に高齢者・障害者配慮がうたわれた。そして現在、標準化政策では①JISの制定、②共用品や情報分野、福祉分野の調査研究、③標準化ビジョンの作成（今年5月に採択予定）——が重点的に推進されている。

03年度中に「ISO/IECガイド71」がJIS化されるほか、凸記号や報知音などの高齢者・障害者配慮設計指針が続々と制定されている。昨年12月に内閣府が公表した「新障害者基本計画」の分野別テーマの中にも、「ガイド71」の成果を踏まえて「生活支援（国際規格提案）」と「生活環境（ガイドライ

ンの作成）」が盛り込まれた。矢野氏は「日本の知見・ノウハウをルール化し、国際的に広げていくことが期待されている。これからはThink global, Act localから、Think local, Act globalの時代。共用品推進機構はリーダーシップを発揮してほしい」と結んだ。

第4回講座：菊地 眞氏
「規格化への取り組み」
「ガイド71」と国際ハーモナイズ



■菊地 眞さん

日本が提案し、2001年に制定された「ISO/IECガイド71」の検討委員会の議長を務めた菊地氏は「いよいよビジネスの実践の場で成果が問われる段階に来ている」ことを冒頭に強調。日本の平均年齢が現在42歳に達し、1960年時点の29歳から実に13歳も高齢化している状況を鑑みても、これら的高齢者層を中心に経済活動を展開しなければ企業も日本経済全体も立ち行かなくなると警鐘を鳴らした。

今後のマーケットでは「65歳未満」「65～75歳」「75歳以上」の3グループを想定する必要がある、とくに「65～75歳」の90%以上を占める元気な高齢者を重視しなければならない。長い人生をわたりきり、衣食住足りて（＝having）、家族や友人との温かな交流も手にし（＝loving）、彼らは「社会における役割と誇り」に自己の存在意義を見いだそうとする段階に達している（＝being）と分析。

企業がこうした高齢者層をつかむためには、「ハード+ソフト+ハート」を総合した魅力的な商品・サービスの提供が求められる。その際、役に立つのが「ガイド71」。逆に言えば、「ガイド71」をどのようにおいしく料理するかが、問われているとも言える。特に「7つのテーマ別の配慮事項を示したマトリックスの使い方そのものが、各社のノウハウになってくる」として、共用品ビジネスでのいち早い成功例の輩出への期待を強調した。

第5回提言：三好 泉氏
「共用品設計デザイン手法」
主観を排し、アクセシブルを実現



■三好 泉さん

三好氏はまず、「審美性などの主観的価値を排除し、わかりやすい評価、表示、情報提供が求められる」としたうえで、共用品は行政・企業・利用者のトリプルWinの商品であり、より多くの人に向けた商品であると強調。共用化設計で考えなければならないことは「アクセシブルの実現」であると指摘。そのためには①何をやらなければいけないか（目標）、②どうすればできるか（アイデアの展開）、③どこまでできるか（可能性と実現性）、④どこまでやればいいのか（採用・実施）——などの視点を示した。

そして、三好氏自身が著した『人にやさしい製品開発のための41のデザインアイデア』（1999年、都立産業技術研究所）や試作版のCD-ROM『ユニバーサルデザイン開発支援データベース』などの内容を例示。最後に、地域・使用者に密着した中小企業の特徴を生かした共用品開発を実現するためのポイントとして、①始めなければ始まらない：配慮設計を参考にできることから、②反響を大切に：ユーザーとのつながりを、③設計者・企業も得ることは大きいはず：新しい発見——などの点を挙げた。

第5回講座：高嶋健夫氏
「関連図書の出版と共用品の普及」
自主、啓発、ビジネスが3本の幹



■高嶋健夫さん

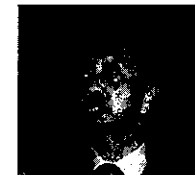
共用品・共用サービス関連図書はE & Cプロジェクト時代の1993年に自主出版した『視覚障害者の朝起きてから夜寝るまでの不便さ調査報告書』をルーツとして、その後、3本の大きな幹が伸びるように広がった。中心の幹が「自主刊行物」であり、他の2本が市販書の「一般向け啓発書」と「ビジネス書・専門書」である。

自主刊行物は現在までに13の調査報告者、『共

用品白書』、小中学生向け副読本などを刊行。啓発書は『朝子さんの一日』（1993年）や『音を見ることがありますか？』（1996年）など小学館のバリアフリーブックを中心に、ポプラ社や学研の学習絵本などが刊行。ビジネス書は『バリアフリーの商品開発』（1994年、日本経済新聞社）に始まり、『共用品ビジネスがわかる本』（2001年、日刊工業新聞社）、『バリアフリーと広告』（同、電通）などが刊行された。

ただ、これを読者対象と、テーマ・目的とをクロス分析してみると、まだ空白の部分が残っており、これを埋めていくことが今後の課題である。

第5回講座：万代善久氏
「不便さとは何か」
「不便さ調査」の特徴と課題



■万代善久さん

機構の調査活動を統轄する万代常務理事はまず、E & Cプロジェクト時代からの「不便さ調査」の特報と課題を指摘。①密着取材による入念な予備調査である、②自由回答中心で生の声を収集している——などの特徴がある反面、新製品の登場による一部結果の陳腐化、脳性まひなど対象者群の欠落などの課題を指摘。高齢者・障害者を対象により幅広い視点で不便さを調べ、インターネット上で常時閲覧できる「不便さデータベース」の整備を進めている現状を説明した。

続いて、視覚障害者、聴覚障害者、車いす使用者、高齢者ごとに、不便さの基本ポイントを例示。そのうえで「留意事項」として、利用体験の違いによって、それぞれの不便さのレベルや期待レベルが異なること、不便さを的確に伝えることの困難性などがあり、各社が独自にモニタリングやクレームなどからオリジナル情報を得るなど、不便さ情報を多様なルートで入手することが重要だと指摘。

他方、情報の活用は、企画から開発、販売、サービスまであらゆる部門が関係するため、「企業全体の感性のレベルを上げなければならない」と力説。不便さの把握は共用品・共用サービス分野への参入の第一歩になると締めくくった。

「共用品の弾性値 (その1: デフレータ)」

後藤 芳一 (共用品推進機構運営委員、日本福祉大学兼任講師)

共用品^{③⑥⑩⑭⑯⑰⑱}の市場の伸びが続いている。そのテンポは「どの程度順調なのか」、2講に分けて点検する。(小さい添え字^{①②③}は、同様の用語が「インクル」第1～21号の本欄に既出であることを示す)。

1. 点検の手順

「市場が伸びている=順調に普及している」といえるだろうか。「周りよりもっと伸びている」「本来はもっと伸びる要因がある(のに、それ以下に留まっている)」場合もある。それを知るには、関わりのある指標の変化と比べるとわかりやすい。

共用品の伸びの順調さを「弾性値」、関連指標の伸びを「デフレータ」とすると、次のようになる。弾性値が1を超えて大きいほど、普及は順調といえる。

$$\text{弾性値} = \text{共用品伸び率} \div (1 + \text{デフレータ})$$

本講ではまず、この「デフレータ」を考える。期間は原則として、統計のそろった1996年以降とした。

2. 高齢者や障害者数の変化

高齢者^{①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺}や障害者^{①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺}の数の変化は、共用品の消費者数の変化に影響を与える。

(1) 高齢者 「高齢者数(65歳以上の人口)」は1901万7000人(96年)から2358万1000人(02年)へ年率3.7%増え、「高齢化率」は15.1% (96年)から18.5% (02年)へ年率0.57ポイント増えた。

(2) 障害者 「障害者数(障害者手帳台帳ベース)」は389万6000人(96年度)から437万3000人(01年度)へ年率2.3%増えた。

(1)と(2)から、高齢者や障害者数の増加は、年率2～4%程度である。高齢者や障害者以外への浸透で、共用品の利用者が増えていると考えられる。

3. 社会的な関心の変化

報道(記事)の件数の多寡は、社会的関心の消長を反映する。主要紙に掲載された件数を96年と02年で比べると、「高齢」関係は年率8.6%増え、「障害」関係は年率12.3%増えた。

「共用品、バリアフリー、ユニバーサルデザイン」

関係は年率40.5%増え、「福祉用具」^{③⑥⑩⑭⑯⑰⑱}関係は年率2.9%増えた。「ハード系」(ハートビル^{②③⑥⑩⑭}、福祉車両^{⑥⑭⑱}、交通バリアフリー^{⑩⑭⑱}など)は年率31.8%増え、「ソフト系」(手話^⑧、点字^{⑦⑯⑱}、補助犬^{⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺}など)は年率12.4%増えた。

高齢、障害ともに関心が高く、年率10%前後の伸びが続いている。共用品などのアプローチや、ハード的な対応に関する報道は、年率30～40%という大きな伸びを見せている。

4. 利用環境の整備

利用環境の整備が進むことによって、不便さを持つ利用者の社会的活動が広がる。この結果、共用品の利用が増えることになる。

(1) 建築物 「ハートビル法認定建築物」は128件(96年)から1760件(01年)へ年率68.9%増えた。エレベーターを設置した「鉄道駅」^{⑤⑩⑭}は1088駅(01年)から1237駅(02年)へ13.7%増え、障害者対応券売機を設置した鉄道駅は420駅(96年)から461駅(02年)へ9.8%増えた。交通バリアフリー法の「移動円滑化基準」に適合する駅は6駅(96年)から47駅(02年)に7.83倍に増えた。

(2) 移動手段 公共的な移動手段^{①②}は、「バス(車高調整、スロープ、リフト、補助ステップ)」^{③⑥⑩}は1654台(96年度)から3698台(01年度)へ年率17.5%増え、「鉄道車両(円滑化基準適合)」^{⑤⑩}は5193両(01年)から7565両(02年)へ45.7%増えた。

個人的な移動手段は、「軽4輪車(車いす移動、回転シート)」は1552台(96年度)から7880台(01年度)へ年率38.4%増え、「小型車(車いす移動、回転シート、運転補助装置)」は5523台(96年度)から2万2206台(01年度)へ年率32.1%増えた。

(1)(2)を合わせると、公共建築物や乗用車の伸びが年率30～60%となっており、ハード的な環境整備が急速に進んでいることがわかる。

(以下、次号)

●ニュース & トピックス

ISOに新委員会、人間工学的に詳細ガイドを検討

国際標準化機構 (ISO) と国際電気標準化会議 (IEC) が日本からの提案で制定した「ISO/IEC ガイド71」(規格作成における高齢者及び障害のある人々のニーズの配慮設計)を巡って、国内外で新しい動きが進んでいる。

まずは、欧州連合 (EU) からの指令を受け、欧州の3つの主要規格作成団体が中心となり、「ガイド71」をそのままEUの規格として採用。その後は、同ガイドを基に、課題となっている詳細のガイドである「セクターガイド」の検討作業が行われる一方で、昨年9月にデンマーク、今年3月にフランスでそれぞれ、同ガイド普及のためのワークショップが開催されている。EUでのセクターガイドは、まず交通機関に関するものが論議されており、日本からも国土交通省、交通エコロジー・モビリティ財団から参考資料を提供している。

同時並行して、昨年秋には、人間工学を担当するISOの委員会に、人間工学的側面から「ガイド71」のセクターガイドを作ることを日本から提案し、新

たな検討委員会を作ることが承認された。同委員会の座長は、独立行政法人産業技術総合研究所の佐川賢・人間工学研究部門感覚知覚グループ長が務めることとなった。

「ガイド71」、いよいよ今夏にはJIS化

さらに、「ガイド71」の日本工業規格 (JIS) 化作業も、専門委員会 (委員長: 菊地真防衛医科大学教授) での検討が終了。今後、日本工業標準調査会 (JISC) 内の技術委員会での審議を経た後、独自の「解説」を付ける形で、今年夏前には発行される見通しである。

この「ガイド71」は、昨年末に内閣府から発表された「新障害者基本計画」の中にも引用されている。また、JISC内に設けられた消費者政策特別委員会では「高齢者・障害者配慮に関する標準化のためのビジョン」作りが進められている。共用品・共用サービスの普及に向けて、ここへ来て国内外でのさまざまな動きが一段と加速してきた。(星川 安之)

●ニュース & トピックス

『高齢者の余暇活動の実態とニーズ調査』報告書を刊行

共用品推進機構は『高齢者の余暇生活の実態とニーズ調査——高齢者施設を含む国内調査と北欧での調査との比較から見えたもの』を発行した。高齢者が生きがいを持って後半生を過ごせる社会にするためには何が求められるか。生きがいの多くを占める「余暇生活」に着目して、調査研究を行ったもの。

本調査は、共用品推進機構個人賛助会員の会「共用品ネット」高齢者研究プロジェクトが実施。家族のために働くことから解放され、自分の夢や希望を実現できる高齢者の余暇生活のあり方やその阻害要因を探ると共に、高齢先進国の北欧の実情も調べ、「元気な高齢者も健康を損ねた高齢者も共にいきいき生活する方法」を探っている。さらに高齢になっ

■『高齢者の余暇生活の実態とニーズ調査』目次

- 第1章 目的と概要
- 第2章 高齢者の余暇生活アンケート調査の結果のまとめ
- 第3章 北欧の高齢者の余暇生活の調査結果
- 第4章 余暇の達人
- 第5章 高齢者の余暇生活の実態から得られた課題

ても歳を感じさせずに生活している「余暇の達人」をレポート。楽しみながら活動することで人に喜んでもらえることを知り、これに生きがいを感じている様子や、老齢になっても何か社会に役立ちたいという気持ちを持っていることを報告している。

本報告書の体裁はA4版・71ページで、価格は1000円(税込み)。購入申し込みは機構ホームページまたは事務局まで。(高嶋 健夫)

●ニュース & トピックス

共用品推進機構

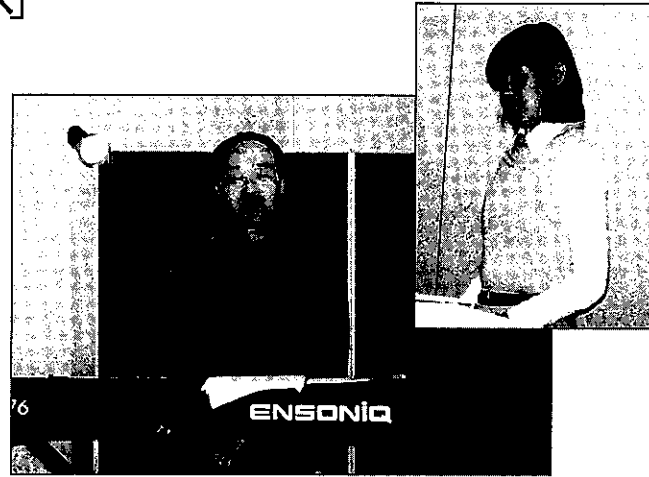
新しい交流の場、「共用品サロン」がスタート

毎月1回開催、第1回は「共用品の本の夕べ」

共用品推進機構の個人・法人賛助会員を中心とする新しい人的交流・情報交換の場をめざす「共用品サロン」がスタートした。第1回目は「共用品の本の夕べ」と題して2月21日に東京・猿楽町の機構事務局会議室で開催、定員をオーバーする46名が参加した。

今回はまず、昨年秋に『だれにとっても使いやすいバリアフリー生活用品100選』（日本経済新聞社）、絵本『スーザンはね……』（評論社）をそれぞれ出版した本誌編集長の高嶋健夫と事務局・森川美和さん（＝写真右）が自著について想いを語った。続いて、森川さんがピアニスト・羽仁知治さん（＝写真左）の生演奏をバックにスクリーン上に映し出される画面を1ページずつ繰り返しながら自ら翻訳した物語を朗読した。その際、視覚に障害のある参加者に配慮し、事務局・金丸淳子さんが1枚1枚の絵の構図について副音的に解説を付けた。

また、今回のライブ朗読には、高級音響機器メーカーのボーズ (Bose) 社が最新の「マルチメディア・モバイル・サウンドシステム」を提供。会場で、商品プレゼンテーションも行われた。



参加者からは、「とてもいい気分。限られた人生、いい人達といい時間を共有したいものだ」と改めて感じている、「家庭的な雰囲気でのプレゼンテーションで楽しめた」、「あまり期待せずに行ったが、良い意味で裏切られた」等々、おおむね好意的な感想をいただいた。

「共用品サロン」は今後、毎月1回開催し、参加者自身による「ミニプレゼンテーション」も実施する予定。新製品の紹介、イベントの告知、共用品のアイデア提案をはじめ、内容・テーマは自由。これらを通じて、より中身の濃い双方向の交流を促進していく考えだ。（高嶋 健夫）

■平成14年度法人賛助会員一覧 (3月1日現在)

1 アイホン(株)	22 (株)山九	44 (株)電通	64 (株)バンダイ
2 (株)アサツー ディ・ケイ	23 山陽プレス工業(株)	45 徳武産業(株)	65 東日本旅客鉄道(株)
3 アサヒビール(株)	24 (株)サンエ芸	46 (株)図書館流通センター	66 (株)日立製作所
4 石川県バリアフリー機器等 開発研究調査会	25 (株)サンリオ	47 (株)トミー	67 (株)ヒューマンルネッサンス研究所
5 (株)イトーキ	26 サントリー(株)	48 (株)虎屋	68 フクビ化学工業(株)
6 (株)INAX	27 (株)GKデザイン機構	49 (株)永谷園	69 (株)藤子・F・不二雄プロ
7 (株)インターリスク総研	28 静岡県	50 (株)ナナ・コーポレート・ コミュニケーション	70 本田技研工業(株)
8 (株)内田洋行	29 (株)資生堂	51 日本政策投資銀行	71 Microsoft Co.,Ltd.
9 エー・アンド・エム スチレン(株)	30 (株)小学館	52 (株)日本能率協会	マイクrosoft(株)
10 (株)エポック社	31 (株)小学館プロダクション	53 日本能率協会 マネジメントセンター	72 Microsoft Asia Ltd.
11 大阪ガス(株)	32 (株)スワニー	54 日本コロムビア(株)	マイクロソフトアジアリミテッド
12 沖電気工業(株)	33 セイコーエプソン(株)	55 日本福祉大学	73 Microsoft
13 オムロン(株)	34 (株)積水樹脂デザインセンター	56 日本能率協会総合研究所	Product Development Ltd.
14 (株)オリエンタルランド	35 積水化学工業(株)	57 日本生活協同組合連合会	マイクロソフト
15 花王(株)	36 (株)千趣会	58 日本ビクター(株)	プロダクトディベロップメント
16 鶴志田デザイン事務所	37 ソニー(株)	59 社団法人日本玩具協会	74 松下電器産業(株)
17 キヤノン(株)	38 大日本紙業(株)	60 日本山形硝子(株)	75 松下電工(株)
18 (株)久家道子エンプロイダリー	39 大日本印刷(株)	61 日本トイザらス(株)	76 盛田(株)
19 (株)講談社	40 (株)高島屋	62 (株)乃村工藝社	77 ヤマハ(株)
20 (株)小松製作所	41 (株)タカラ	63 (株)博報堂	78 (株)ユーディー・ジャパン
21 コンビ(株)	42 タマチ電機(株)	64 (株)リクルートエイブリック	79 ユニ・チャーム(株)
	43 (株)ツクダ		80 (株)リクルートエイブリック

共用品通信

【お知らせ】

- ROBODEX2003 (4月3日～6日、パシフィコ横浜)
3日のセッション2「第1回ネット・ロボット・ミーティング」は評議員の山根一真氏が司会。5日のセッション6「共用ロボットの誕生」は高嶋健夫・本誌編集長が司会。
- 「ユニバーサルファッションフェスタ」を開催
ユニバーサルファッション協会が「人にやさしいスグレもの展」と題して、3月27日に東京・両国の国際ファッションセンターで開催。
- 2003年度消費生活アドバイザー資格更新講座
6月14日札幌、同29日東京、7月12日名古屋の各講座に、高嶋健夫・「インクル」編集長が登壇予定。

【トピックス】

- (獨)日本点字図書館および本間一夫・同館名誉館長に対する「井上靖文化賞」の受賞式開催(1月28日)
- 「新紙幣の触覚識別に関する提案」を財務省理財局に陳情(2月6日)
- 「共用品ネット」による電子投票に関する調査結果を総務省に報告誌、改善を要請(2月20日)

【高齢者・障害者配慮関連 ISO、JISの動き】

- ガイド71 JIS化WG (1月7日)
- ガイド71 JIS化WG (1月13日)
- ガイド71 JIS化委員会(2月7日)
「ISO/IECガイド71」の日本工業規格化に向けての検討作業を行った。
- 第2回高齢者・障害者配慮標準化提言サブWG(1月21日)
- 第3回同サブWG(2月6日)
- 第3回高齢者・障害者配慮標準化提言WG(2月28日)
標準化の方向性についてのビジョン案を検討。

【共用品・共用サービス促進会議の動き】

- 不便さ分科会(1月22日)
- 同(2月17日)
不便さ調査の調査項目の検討を行った。
- 第11回共用品・共用サービス促進会議(2月24日)
全体会議で平成15年度事業計画についての情報交換と検討を行った。

【共用品推進機構の動き】

- 第2回共用品市場規模高度化調査委員会(1月21日)

○第3回同委員会(2月19日)

- 各分野における共用品の課題について話し合った。
- 第10回運営委員会(1月30日)
- 第11回同委員会(2月24日)
「共用品サロン」の開催などについて検討。
- 第27回企画委員会(1月10日)
- 第28回同委員会(2月12日)
企画委員会と運営委員会の分担確認を行った。
- 聴覚障害者ニーズ調査委員会(2月10日)
聴覚障害者のニーズの調査結果について意見交換。

【講演・シンポジウム・訪問】

- 星川専務理事、「第2回ユニバーサルデザイン全国大会 in 埼玉」に分科会座長として出席(1月23日)
- 星川専務理事、月刊『ケアマネージメント』座談会に出席(1月30日)
- 東京都消費者月間実行委員主催の「消費者とユニバーサルデザイン事業者との意見交換会」、高嶋・本誌編集長がコーディネーターを務める(2月19日)

【報道・マスメディア取材】

- スカパーフェクTV取材(1月14日)
『ムームのお出かけチャンネル』で共用品紹介。
- 読売新聞と系列CSテレビ取材(1月30日)

【来訪・来所】

- サンフランシスコ在住の草地美穂さんが来訪(1月7日)
米国における学校教育支援システムの話をお聞きした。
- すぎのこ劇団の小澤幸雄理事長(1月9日)
中国人形劇公演に関するご報告、中国人学生紹介。
- 2005年日本国際博覧会政府出展事業ディレクターチーム(1月20日)
- 東久留米市消費者モニター見学会(2月14日)
- 経済産業省関東経済産業局産業企画部(2月18日)

<読者の皆様へのおお願い>

「共用品通信」欄では新製品・新サービス、セミナー・講演・展示会、モニター募集など、個人・法人賛助会員からのお知らせも掲載致します。事務局「インクル編集担当宛て」に、ニュースリリース、イベント案内などの情報をお寄せください。Eメールも歓迎です。

jimukyoku@kyoyohin.org



事務局長だより

☆☆☆

「手袋付き白杖」の温かさ あるデザイン学生にもらった元気

ほしかわ やすゆき
星川 安之

☆…今年に入ってすぐ、デザイン学校3年という学生さんから電話があった。「バリアフリーなものを作る課題に取り組んでいます。点字ブロックは、高齢者、車いす利用者にとって必ずしも都合がよいわけではないと聞きました。それに代わるものを作りたいと思うので、話を聞いていただけますか？」。

課題の大きさ（無謀さ？）とは裏腹に、人の話をちゃんと聞こうとする真摯な気持ちが電話越しにも伝わってきた。

IT（情報技術）を活用した視覚障害者用誘導システムは複数で研究されていて、現在その標準化の作業も進められていること、誘導ブロックを急に急変えることの弊害などを説明する私の話に、彼はじっと聞きいていた。

「ところで、目の見えない人に直接、意見を聞かれましたか？」と尋ねると、しばしの沈黙のあと、「まだです。一度話を聞いてみます」と少し落胆した声で電話は終わった。☆…2週間後、再び電話がかかった。「是非見ていただきたいものがある

ので、うかがってもよいですか？」。翌日、初めての来所。彼が手にしていたのは、ハイテク誘導システムならぬ、折り畳み式の白杖だった。白杖の取っ手部分に手を覆うカバーが付いている。

あれから目の不自由な人と話すために、(株)国際視覚障害者援護協会を日本点字図書館の人に紹介してもらい、訪問したという。そこで出会ったのは、視覚に障害のあるアジアからの男子留学生。互いに言葉は十分ではなかったが、彼の「話を聞きたい気持ち」が、コミュニケーションを成立させた。すぐに、一緒に日本酒を飲みに行く仲になったという。

暑いアジアの国から来たその留学生は「日本の冬がこたえる」と言う。白杖を持つ手は、手袋をしてしまうと感覚がにぶり危険。そんな「不便さ」を、デザイン学生の彼に訴えた。

最初の試作品は、腕のほうに縛り付けるタイプ。「あったかい」。でも、これでは万が一転んだ時に危険。そこで、杖に結び付け、なおかつ折り畳んでいる時にはカバーにもなるように作り直した。「これならいい」。

2人はさらにうまい酒を酌み交わしたという。

「ところで、新しい誘導システムのほうは？」と聞くと、少々照れながら「直接、当事者から話を聞くことの大切さを学びました。まずは、見つけた課題を解決することから始めます」と笑った。

☆…私がまだ障害のある子供のおもちゃの開発を始めたばかりの22年前、朝日新聞の夕刊に『盲と目あき社会』というルポが連載された。日本中を歩き回り、視覚に障害のある人たちの本音を聞き出す。その迫力たるやすさまじかった。たまたま、そのルポを書かれた藤田真一論説委員に連載中にお目にかかる機会があった。藤田氏は私に「今の仕事を続けるのであれば、1人でいい、お互いに心を開いて話し合える障害のある人と出会いなさい。それは貴方の努力次第だよ」と言われた。

今回のデザイン学生が訪ねてこられた時、22年前のこの時の記憶がよみがえった。学生さんはその後、さらに他の目の不自由な人にも意見を聞きながら、「お互いの納得」を見つける努力を続けている。

機構の事務局にいると、こんな元気をもらう時が少なくない。機構は感謝と共に5年目を迎える。(★)

作る人と使う人の共用品情報誌

インクル 第23号

2003(平成15)年3月25日発行

"Incl." vol.5 no.23

©The Kyoyo-Hin Foundation, 2003

隔月刊、奇数月に発行

一般頒価 1部 1000円

(但し、個人・法人賛助会員については、購読料は年会費の中に含まれています)

※視覚障害のある方など、墨字版がご利用できない方にはTXTファイルのフロッピーディスクを提供しています。必要のある方は、事務局までお申し出ください。

編集・発行 財団法人共用品推進機構

郵便番号 101-0064

東京都千代田区猿樂町2-5-4 OGAビル 2F

電話：03-5280-0020

ファクス：03-5280-2373

Eメール：jimukyoku@kyoyohin.org

ホームページURL：http://kyoyohin.org/

発行人 鴨志田厚子

事務局 星川 安之

万代 善久

森川 美和

橋本 英和

金丸 淳子

編集長 高嶋 健夫

執筆・協力 小塚 通宏

後藤 芳一

佐藤 俊夫

中野奈津美

牧内 智子

山本百合子

制作 日経BP クリエーティブ

印刷・製本 光写真印刷

本誌の全部または一部を視覚障害者やこのままの形では利用できない方々のために、非営利の目的で点訳、音訳、拡大複写することを承認いたします。その場合は、財団法人共用品推進機構までご連絡ください。

上記以外の目的で、無断で複写複製することは著作権者の権利侵害になります。